

平成23年4月4日

学位授与式告辞－日本の再建に向けて

渡辺利夫

諸君！ 卒業おめでとう。どうか諸君、拓殖大学で学んだこの四年間、大学院の修士生であればさらに少なくとも二年間を加えた数年間の拓殖大学での学園生活に誇りをもって、立派な社会人として活躍して下さい。私は心からそう念じています。

現在の日本はまさに国難とっていい、非常事態の中に置かれています。東北地方を中心に東日本を襲った大地震、大津波、原子力発電所の毀損によって、信じたくはありませんが、最終的には数万人の死者となるのではないかと思われる手ひどい惨劇を、現在の日本は味わわれています。

私は昭和一四年の生まれです。幼少期に真っ赤に燃え盛る街の炎の中を恐怖に打ち震えながら逃げ惑い、辛くも生き延びたという経験をもっています。第二次大戦での敗北、本土攻撃を受けて、日本は亡国の寸前にまで追いつめられたのです。その時の耐え難いトラウマが、もう六五年も前のことなのに、まだ私の胸の中に残っております。現在、東日本を覆っている悲劇は、第二次大戦におけるあの敗北以来の、第二の国難というべきものにちがいありません。

大地震につづいて大津波が東日本の太平洋側の町や村を、黒く巨大なエネルギーの塊となって次々と飲み込んでいきました。そのさまをみながら、私の胸裏には「日本崩壊」というフレーズが浮かんで消え、消えては浮かんでいました。

しかし、諸君！ 第二次大戦の敗北によっても日本は崩壊することはありませんでした。事実はその逆でした。敗戦直後の混乱期を経て、またたく間に世界的にも希有な高度経済成長の時代を経て、日本は世界有数の国家として蘇生したのです。

同じように、今回の悲劇からも日本は立ち上がっていくものと思われまます。いや、立ち直っていかなければならないのです。そして、こういう悲劇の最中であってこそ発揮される真の力が日本人の中には宿って

いるはずだと私は、自分の幼少期や青春時代の経験からして、そう確信しています。

あれほどまでに酷い災難を受け、あるいは親を、あるいは夫や妻を、子供さえ失った人々でも、住み慣れた家や共同体を消失させてしまった人々でも、静かにじっと耐えて生きながらえています。自分は悲運に遭遇したけれども、もっともっと深い悲しみの中でもがいている人々が他に一杯いるのだと自らを慰め、回りの人々を励まし、人々の救済のために残っているエネルギーを使い果たしている人々の姿が私の目に焼き付いています。

温かいうどんが配られると聞いて避難所の前に整列した人達が、しかし、配られるのは二〇数杯だと聞かされ、受け取ったうどんの入った茶碗を自分の後ろの人に渡し、渡された人がさらに後ろの人に渡していくさまなどをみていると、日本人の強い忍耐力と、その忍耐力に裏付けられた深い情の心、人間として最も尊い徳目である自己犠牲や献身の精神を、私はそういう光景の中に見て取り、胸を詰まらせます。

自分たちの悲運を語ることは少なく、国家や政府や自治体に対する恨みを口にする人は稀です。どんなにか酷い運命の中に投げ込まれても、ただこれを運命としてあるがままに受け容れ、与えられた条件の中で懸命に生きる人間の姿は崇高でさえあります。

共同体の絆の強さの尊さも今度の悲劇の中で、私は再認識させられております。人間を相互に結び付ける強い絆あってこそその共同体です。そういう絆があって、初めて国家は国家たりうるのです。立派な国家とは、立派な共同体を基礎としてこそ成立するものだと改めて思わずにはいられません。

こうした悲劇が起これば、開発途上国はもとより、先進国でも、アメリカでさえも、政府や自治体への罵詈雑言、暴行や略奪などが必ずといっていいほどに起こります。しかし、阪神淡路大地震の時がそうであったように、それより何十倍もの規模のこの大惨劇の中にあっても日本人は、自治の原則に則り秩序と規律を守りながら、自らを励まし、他を思いやる心を失ってはおりません。

諸君！　こういう悲劇の時期に諸君は拓殖大学・大学院を卒業したのです。数万を超える人々の生死がいまなお不明な悲劇的状况のなかにあつて、私どもは卒業式という祝典を開催するという気にはどうしてもなれませんでした。ご覧のような随分と簡略化された形での学位授与式とならざるを得なかった次第です。この点、事情を是非ご賢察下さいますようお願いいたします。

最後になりますが、私が入学式や卒業式の告辞の中で、毎年、必ずお話ししておりますことを手短かに申し上げて、今日の学位授与式のせめてものはなむけの言葉としたいと考えます。それは「公」と「私」、あるいは「利己的」と「利他的」ということについてです。

人間とは、元来が利己的な存在です。私もそうです。誰しも自分の胸に手を当てて己れを省みれば、自分がいかに利己的な存在であるかにすぐに気がつくはずで、他の人より沢山のお金が欲しい、他の人より少しでも高い地位が欲しい、他の人よりも高い評価が欲しい、そういう欲望をもっていない人は少なからうと思います。そういう利己的な欲望があつて人は初めて成長し、社会の中で生き残っていくわけですから、利己的であることが悪いことであるはずはありません。

しかし、同時に私どもは利他的、つまり自分以外の他の何者か、自分を超える他の何者かのために生きる存在でもなければなりません。人間とは、利己的であると同時に利他的な存在であつて、その二つをきわどく均衡させながら歩いていく、そういう存在でなければならないのだと私は考えます。

私が諸君にいいたいのは、自分のため、自分の私的な利益のためだけに生きていては、私どもは決して本当の幸せを手にはすることはできないということです。私的な利益はこれをいくら追求しても、その向こうにあるものは、小さな自己満足だけです。自分以外の何者かのために生き、共同体や社会に献身することによって得られる、心の底から湧きいずるような幸せは得られません。

「公」に生きる、といえは少々抽象的に過ぎるかも知れませんが、私のいいたいことは、要するに貧しい国々、虐げられし人々、弱い立場の

人間のことにつねに思いを寄せ、彼らのために行動するという事です。経験してみればすぐにわかることですが、そうした思いと行動がわれわれをなぜか名状し難い誇りと幸福に導いてくれるのです。人間とはそのような存在として創られているものだと思われているのです。

拓殖大学の伝統は、「公」に生き「公」に奉仕する人間を育成することにあります。この入学式に先立って諸君がご覧になったビデオでも説明されておりましたように、台湾協会学校として創立され、台湾の統治と近代化に渾身の力を注いだ先輩達、その後は台湾のみならずアジアやラテンアメリカの多くの国々で「公」に殉じた先輩達の血と涙があって、拓殖大学は拓殖大学たりえているのです。

拓殖大学に学んだ諸君！「公」に生きようではありませんか。そうすることによって初めて得られる誇らしさ、充実した晴れやかな人生に目覚めようではありませんか。

以上です。ご静聴、ありがとうございました。

(以上)